

# 大量死と探偵小説

笠井潔

探偵小説にとって  
「死」とは何か？

本格ミステリ批評界における最重要理論体系  
「大量死理論」がここに集成！



大量死と探偵小説

笠井潔

星海社

315





「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論のアイデアを得たのは、一九九〇年のことだった。八九年には北村薫、有栖川有栖、山口雅也、我孫子武丸などの有力新人が相次いで登場し、すでにデビューしていた綾辻行人、歌野晶午、折原一、法月綸太郎などの新作も順調に刊行されていた。本格探偵小説の第三の波は、この年にムーヴメントとして自立したといえる。

一九八九年は、東欧社会主義政権が連続倒壊した年でもある。ベルリンの壁の崩壊は、九一年のソ連解体に帰結する。二〇世紀とは第一次大戦、第二次大戦、東西冷戦と連続した世界戦争の時代だった。とすれば、社会主義の崩壊による世界戦争の時代の終わりは、精神的な意味で二〇世紀の終わりを示しているのではないか。

第三の波の勃興と二〇世紀の終わりという二つの要素が思わぬ化学反応を起こして、「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論のアイデアが生じたことになる。このアイデアを前提にドイツのハイデガー哲学と英米の大戦間探偵小説の同時代性を主題とした『哲学者の密室』

の構想をまとめ、九一年に雑誌連載をはじめることになる。『哲学者の密室』が刊行された九二年には、「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論の要約としてエッセイ「大量死と探偵小説」(『模倣における逸脱』所収)を書いた。少し長くなるが、次に中心的な箇所を引用しておくたい。

人類がはじめて経験した大量殺戮戦争である第一次大戦と、その結果として生じた膨大な屍体の山が、ポオによるミステリ詩学の極端化をもたらした。戦場の現代的な大量死の体験は、もはや過去のものかもしれない尊厳ある、固有の人間の死を、フィクションとして復権させるように強いた。

機関銃や毒ガスで大量殺戮され、血みどろの肉屑と化した塹壕の死者に比較して、本格ミステリの死者は、二重の光輪に飾られた選ばれた死者である。犯人による、巧緻をきわめた犯行計画という第一の光輪、それを解明する探偵の、精緻きわまりない推理という第二の光輪。第一次大戦後の読者が本格ミステリを熱狂的に歓迎したのは、現代的な匿名の死の必然性に、それが虚構的にせよ渾身の力で抵抗していたからではないか。

第一次大戦で大量生産された、産業廃棄物さながらの瑣末な死は、同時に瑣末な生の陰画でもある。それは、まぬがれることのできない二〇世紀的な死と生の必然性を象徴している。

複数のミステリマニア青年が作中を彷徨する点で、新本格の先駆作品としても評価できる竹本健治の『匣の中の失楽』は、二〇世紀の世界戦争による大量死の陰画にほかならない、われわれの時代の凡庸な「大量生」の息苦しさを中心的な主題としていた。偏差値でランクづけされた、ベルトコンベアー式の人生。その終点は、どんな個性も許されないだろう病院での無名の死、尊厳なき死である。

第一次大戦の大量死が、英米にポオのミステリ詩学を徹底化する本格作品のブームをもたらした。他方、第二次大戦の記憶さえも風化した日本のポストモダン世代の、強いられた「大量生」の窒息しそうな日常が、新本格ブームの背景にはあるのかもしれない。

『哲学者の密室』で作中の登場人物が語る「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論は、『探偵小説論』連作（序説、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）で理論的に緻密化されていく。

『探偵小説の哲学』の著者ジークフリート・クラカウアーが、第一次大戦後の典型的な大衆芸術として『大衆の装飾』で論じているラインダンスだが、「ラインダンスの新しい舞踏観、その根底にある新しい人間観」（『探偵小説論Ⅰ』）は、「人間を機械運動の歯車のごときものに還元する意志」という点で、「ナチズムのサイボーグ兵士の理想に、あるいはスターリン芸術理論を支えている『鋼鉄の人』のイメージに至近距離で共鳴」している。また「探偵小説は『芸術』ではない、『パズル』なのだ」と断定したとき、ヴァン・ダインは一九世紀的な人格性をパズルの項に還元する非情さの感受において、その時代的な必然性の認識において、塹壕戦から生じた二〇世紀精神に内在していた」。

『探偵小説論』で新たに加えられた重要な論点が、第一次大戦による近代的人間の「死」と、論理パズル小説としての探偵小説の必然的な照応性だ。「カフカの小説では内面性を剝奪された近代的人間の残骸が作品空間を彷徨するのだが、探偵小説の場合には、作品空間がそれ自体の論理において人物から内面性を剝奪してしまう」（『探偵小説論序説』）。

「謎—論理的解明」のプロットを中軸とする論理パズル小説としての探偵小説は、第一次大戦の大量死という経験がもたらした「芯をくり抜かれた焼きリンゴさながらに、あたかも近代的内面を抜きとられたような人物」の存在を前提としている。しかも探偵小説空間

を彷徨する二〇世紀的に空虚なキャラクターは、たとえば二重の光輪に飾られた被害者に典型的なように、「人間の復権」を虚構的に演じてもいる。こうした第一次大戦以前と以後、一九世紀性と二〇世紀性の奇妙な絡みあいのなかに、他ジャンルには見られない探偵小説形式の固有性が認められる。

「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論は、日本の探偵小説をめぐる歴史的な難問に新たな解答を与えるものでもある。たとえば戦前の本格論争、戦後の芸術論争など。

一九二〇年代、三〇年代の日本で、同時代の英米探偵小説に匹敵する本格作品が書かれることなく、アメリカで本格ジャンルが衰退した第二次大戦後になって、ようやく大戦間の英米に匹敵する傑作群が出現しえたというタイムラグの秘密にかんして、「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論は次のように考える。

第一次大戦を対岸の火事と見なした日本は、探偵小説形式の前提である二〇世紀的な大量死とも無縁だった。江戸川乱歩や横溝正史は、いわば第一次大戦以前の時代を生き延びたわけで、大戦の産物としての「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」の水準には達しえない作家的限界を課せられていた。第二次大戦で日本人は、はじめて世界戦争のリアリティに直面する。第二次大戦後の日本で、英米の第一次大戦後に匹敵する本格探偵小説の傑作が書かれ

たのも当然のことだ。

以上は、戦前の本格論争にかんして最も説得力のある解答といえる。では、戦後の芸術論争の場合はどうだろう。

木々高太郎などの芸術論者は、探偵小説は芸術に昇格しなければならぬと主張した。しかし「探偵小説Ⅱ 二〇世紀小説」論の観点からすれば、大戦間探偵小説はモダニズムⅡ アヴァンギャルド芸術運動の有機的な一翼なのだ。シュルレアリスムや表現主義が「芸術」であるなら、探偵小説も「芸術」である。なにも木々の掛け声で、ことあらためて「芸術」化される必要などない。

大戦間のモダニズムⅡアヴァンギャルド芸術運動は、一九世紀的な文学観や芸術観に致命的な打撃を加えた。こうした点からすれば芸術論者と論理パズル派の対立は、一九世紀的芸術観と二〇世紀的なそれとの対立だったともいえる。論理パズル派の理論的な低水準が、論争を必要以上に煩雑にしたにすぎない。一九世紀精神と二〇世紀精神を折衷しようとする点で、「一人の芭蕉」という江戸川乱歩の解決案には、はじめから根本的な無理がはさまれていた。

日本の探偵小説に限定されないものとして、ハワード・ヘイクラフトを代表格とする「探

偵小説「市民文学」論をめぐる難問もある。司法や警察制度の近代化が探偵小説の前提だとするヘイクラフトのような論者は、だからファシズム諸国やポリシェヴィズムに支配されたソ連には探偵小説が根づかないのだと主張した。見込み捜査と拷問が日常的な世界では、推理によって真相に迫る名探偵にはたしかに出る幕がない。しかしヘイクラフトの論では、近代的な警察制度を世界ではじめて確立したフランスに、大戦間探偵小説運動が不在だった理由をまったく説明できない。

フランス、ドイツ、ロシアなど第一次大戦の戦場となった大陸諸国では、大戦後にモダニズムⅡアヴァンギャルド芸術運動が猛烈な勢いで巻き起こる。他方、直接の戦場となることを回避しえたイギリス、アメリカ、そして日本におけるモダニズムⅡアヴァンギャルド芸術運動は、大陸諸国の模倣以上の域を出るものではない。これら三国では、いわばモダニズムⅡアヴァンギャルド芸術運動の代替物として探偵小説運動が展開された。大量死という経験の直接性と間接性の相違が、モダニズム小説と探偵小説を分けた。それがまた、二〇世紀的な方法で一九世紀的人間の虚構的な復権を追求するという、複雑な二面性を探偵小説にもたらしたのだろう。

フランスにおける大戦間探偵小説の不在を説明するには、「探偵小説Ⅱ市民文学」論より

も「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論のほうが有効だ。

提起された時点で「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」には、整合化されなければならない理論的な空白が幾点か残されていた。たとえば一九四〇年代以降、二〇年代、三〇年代に全盛を誇ったアメリカで、論理パズル小説としての探偵小説がジャンルの消滅した事実を、どのように説明できるのか。日本の戦後本格もまた、アメリカの先例を踏襲するように六〇年代にはジャンルの危機に陥る。探偵小説が二〇世紀小説であるなら、四〇年代アメリカの、あるいは六〇年代日本のジャンルの危機はどのように説明できるのか。

あるいは綾辻行人『十角館の殺人』（一九八七年）を起点に、九〇年代を通じ旺盛な生命力を発揮し続けて今日にいたる現代日本の探偵小説運動それ自体が、「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論への無視できない反証ではないだろうか。このムーヴメントが自立した一九八九年は、精神的な意味で二〇世紀が終わった年だ。「大量死Ⅱ大量生」の一般論を前提とした、「第二次大戦の記憶さえも風化した日本のポストモダン世代の、強いられた『大量生』の窒息しそうな日常が、新本格ブームの背景にはあるのかもしれない」という理解は、必要な批評的強度を達成しえていたのか。

法月綸太郎の提起になる「後期クイーンの問題」は、「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」論とは

異なる角度から、探偵小説と二〇世紀精神の関係を問おうとする試みだった。厳格な形式化と、その必然的な破綻に二〇世紀精神の運命を見た柄谷行人の『隠喩としての建築』を参照しながら、法月はエラリー・クイーンの二〇世紀性を語ろうとしている。

国名シリーズの最高作とも評価される『ギリシャ棺の謎』だが、『探偵小説と二〇世紀精神』で検証しように、探偵エラリーの推理には無視できない欠落がある。しかし、だから『ギリシャ棺の謎』が失敗作だと主張したわけではない。

発見された論理的欠陥は、探偵小説を論理パズル小説と等置する立場からは致命的な傷だといわざるをえない。しかし探偵小説は論理パズルに徹底的に内在することで、結果的に論理パズルを超えてしまう倒錯的な企てなのだ。「操マニピュレーションり」というデッドロックに出くわしたクイーンは、それを探偵小説的論理に回収しようと全知全能を傾けた。探偵エラリーの論理的破綻こそが、この闘争に傾注された情熱と知力の圧倒的な量を、否定しがたいものとして読者に印象づける。

二〇世紀精神は、完璧に理性的な狂気があるという事実に関心ではいられない。狂気と理性の二項対立に安住できる精神は一九世紀的で、完璧に理性的である必然的な結果として、狂気と見分けがつかなくなる異様な精神こそ二〇世紀的だ。ヴァン・ダインの『僧

『正殺人事件』が先駆的に明らかにしたように。しかしヴァン・ダインは、狂気と理性の極限的な同一性を主題的に提示したにすぎない。

後継者のクイーンは二〇世紀精神の器用な論評家だったヴァン・ダインを超え、生身の小説家として二〇世紀の観念的倒錯劇を演じぬいたのだろう。『ギリシャ棺の謎』に見られる探偵エラーリーの論理的欠陥は、たんなる不注意の産物ではない。徹底して理性的であろうとして、理性の埒外に踏みだしてしまう二〇世紀精神の異様性が、この探偵小説では作者の意図を超えて露呈されている。それがクイーンという作家を、ライツヴィル連作や『盤面の敵』や『最後の一撃』にまで押しやったに違いない。

社会主義の崩壊と世界戦争の時代の終わりが、人類を破局的な暴力から最終的に解放したわけではない。冷戦に勝利したアメリカのもとで恒久平和が達成され、グローバル経済が世界にかつてない繁栄をもたらすという、二一世紀の樂觀的展望はイスラム革命勢力の9・11攻撃で決定的な打撃を蒙った。そして到来した新世紀は反テロ戦争からウクライナ戦争やガザ戦争まで、同時多発する世界内戦の時代となる。

またグローバルイズムの全面化は社会の二極分解を加速し、階級脱落化<sup>デクラッセ</sup>した産業労働者や自営農民層は排外主義化しつつある。アメリカのトランプ派に代表される極右ポピュリス

ム運動が、二〇世紀の全体主義を再現にすることになるのかどうか、事態は混迷を極めて  
いる。

世界内戦は情報戦を含むハイブリッド戦争だし、二一世紀はインターネットとハッキング、フェイクニュースとポストトゥルースの時代でもある。この時代に「謎ー論理的解明」の探偵小説はどのような変容を蒙りつつあるのか。二一世紀を迎えた探偵小説の現状を検証する前提としても、「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説」の歴史的把握は不可欠だろう。

\*

「大量死理論」として言及されることが多い「探偵小説Ⅱ二〇世紀小説論」は、『探偵小説論』連作や『ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』連作などで多視点から重層的に論じた。しかし筆者の探偵小説関連の評論書のひとつは、刊行されてから十年以上が経過していて入手困難な場合も多い。それで今回、筆者の旧稿を取捨選択してアンソロジーを編むことにした。本書を手にした新世代の探偵小説読者から、二一世紀探偵小説論が提起されることを期待している。

## 目次

はじめに 3

### I 探偵小説と世界戦争 17

### II 探偵小説と二〇世紀精神 51

### III 戦後探偵小説作家論 123

1 横溝正史論——論理小説と物象の乱舞 124

2 高木彬光論——屍体という錘と戦争体験 156

IV 大量死から大量生へ 193

- 1 探偵小説と二〇世紀の「悪魔」 194
- 2 異様なワトスン役 206
- 3 「魂」を奪われた小説形式 213
- 4 大量生と「大きな物語」のフエイク 223
- 5 アメリカニズムと「小さな物語」 233



I  
探偵小説と世界戦争

探偵小説の歴史は、エドガー・アラン・ポオの「モルグ街の殺人」を起点とするといわれる。この説にはむろん妥当性があるに違いない。しかし探偵小説がジャンルとして確立されたのは、明らかに第一次大戦後のことだ。ポオ以降、謎と推理の物語は多数の作家の関心を集め、断続的に書き継がれてきた。『ルコック探偵』のエミール・ガボリオ、「ストランド」誌に連載されたホームズ物語で絶大な人気を博したコナン・ドイル、『月長石』のウィルキー・コリンズ、『黄色い部屋の謎』のガストン・ルルー、オースチン・フリーマンとG・K・チェスタトンなどなど。

しかしポオの後継者としては最大の成功をおさめたドイルにも、謎と論理の物語を質的に深めたチェスタトンにも、固有のジャンル作家という自覚は見られない。彼らが生きたフランスの第三共和政時代や、イギリスのヴィクトリア朝時代や、二〇世紀初頭の「ベル・エポック」期に、ポオが発明した探偵小説形式が固有ジャンルとして確立されていたとはいえない。

それはオノレ・ド・バルザックやチャールズ・ディケンズなど主流文学の作家、カトリック思想家や医者出身で歴史小説家志願者、さらにフェニモア・クーパー『モヒカン族の最後』を都市型に展開した犯罪小説のプロパー作家(『パリの秘密』のウージェーヌ・シユールを先駆者とする)などが、ときに、たまたま試みることもあるという種類のマイナーな小説形式として書き継がれてきたに過ぎない。

ルルーやドイルが生きた時代とはむしろ一九世紀だ。精神史の観点から事後的に捉え返るなら、一九世紀は一七八九年のフランス大革命から一九一四年の第一次大戦の勃発までの一時代だった。年表の上では二〇世紀に属するが、まだ第一次大戦の惨禍を知らなかった二〇世紀初頭の十数年間の「ベル・エポック」期は、帝国主義世界戦争の不吉な予感をはらみながらも、依然として一九世紀的な牧歌性の裡にまどろんでいた、古き良き時代だった。もちろん「良き時代」とは帝国主義諸国の市民たちにとってのことで、侵略され植民地化された諸国の人々は苛酷な政治支配と暴力的略奪にさらされていた。

ドイルやコリンズやチェスタトンの作品が、世界を制覇した大英帝国を背景として書かれている事実は、あらためて指摘するまでもあるまい。『四つの署名』や『月長石』などでは、犯罪の動機は植民地に見いだされる。本国と植民地の空間的差異性が、作中で物語ら

れる犯罪の起源に位置している。イギリスを覇権国とする一九世紀の世界体制と、新興ドイツ帝国の和解しがたい対立が最初の世界戦争を惹きおこした。

またガボリオのルコックやドイルのホームズに顕著に見られる探偵方法を、一八世紀の啓蒙精神に起源をもつ、一九世紀的な実証精神の産物として理解することができる。真実に到達するためには、もはや神も信仰も必要とはされない。前時代の神学に代わって、経験科学が知の王座をしめるに至った。緻密な観察、論理的な推論、そして実験。実証精神が万能の方法と見なした、それが真理への唯一の道なのだ。観察家ホームズの趣味が化学実験であることも、決して偶然ではない。

実証精神の背景には理性にたいする無条件の信頼がある。理性的存在である人間は、必要な努力を惜しまないかぎり個人的にも社会的にも、倫理的にも経済的にも進歩と向上を達成することだろう。ようするに人間の未来は無限だと信じられていた。中世的な神は追放され、理性人⇨労働人としての近代的人間が世界の中心をしめる。一九世紀とはそのような「人間の世紀」にほかならない。

晩年のホームズの最後の仕事がドイツとの諜報戦だったことを思い出してもよい。一九世紀を代表する名探偵キャラクターは、世界戦争の到来を予感しながら老いた足取りで退

場していく。そして探偵小説をジャンルの確立するだろう新世代の作家たちが、きびすを接して登場してきた。たとえば『スタイルズの怪事件』のアガサ・クリステイと『誰の死体?』のドロシー・セイヤーズ。そのようにしてホームズからポアロやピーター卿へ、それぞれの世紀を代表する探偵キャラクターもまた交替した。

一八九〇年に生まれたクリステイは、ヴィクトリア朝時代の残照を身に浴びて成長した一九世紀最後の世代だ。しかし「人間の世紀」、平和と繁栄にまどろんでいた一九世紀は不意に轟音をたてながら崩壊する。

英国は戦争を始めていた。

その当時と今のわたしたちの感じの違いをどう言いあらわしていいかわからない。今、戦争が始まったら、わたしたちはぞつとはするだろう、おそらく驚きもするだろう。が、びっくり仰天はしないだろう、というのは、わたしたちはみな戦争はあるものと思っっている——過去にもあったし、いつまたあるかもしれないと思っっているからである。しかし、一九一四年、それまで戦争はずつとなかった……どれくらいの間? 五十年……もつとだったかな? いかにも、大ボアア戦争なるものがあったし、北西辺境地方で小

ぜりあいもあつたが、これらは自国そのものを巻きこんでの戦争ではなかつた——いふなれば大規模の軍事演習、遠隔地での国力の維持であつた。こんどは違ふ……わたしたちはドイツと戦争を始めたのだ。

(『アガサ・クリステイ自伝』)

英独の開戦を知らされたクリステイの「びっくり仰天」は、一時代の終わりに際会した一九世紀人の、堅固な大地が足下で崩れはじめたにも等しい巨大な精神的衝撃を示している。避暑地トーキイで暮らす中産階級の平凡な娘の生活を、世界戦争は一挙に、そして決定的に変えた。

クリステイは同世代の多数の娘たちとおなじように、本国に移送された傷病兵のボランティア看護師に志願する。待ちかまえていたのは、一九一八年九月まで総計で三千四百時間にもおよんだという傷兵病院での激務だった。クリステイが「吐物の清掃や化膿した傷の臭気」にまみれて過酷な看護作業に従事していたころ、大陸の西部戦線ではかつて人類の目撃したことのない大殺戮が演じられていた。

最初の五カ月の戦闘でドイツ軍は百万、フランス軍は八月の二週間で三十万を超える、想像を絶する数の戦傷死者をだした。フランス軍は一九一四年の年末までに三十万の戦死

者と六十万の負傷者を数えた。ドイツ軍の被害も似たようなもので、「一九一四年も末になるとフランスもドイツもほぼ全家庭にひとりの戦死者を出した計算になる」（モードリス・エクスタインズ『春の祭典』）。

機関銃、長距離砲、軍用航空機、潜水艦、毒ガスなどの大量殺戮兵器は戦場に膨大な屍体の山を築いた。産業廃棄物にも等しいボロ屑のような死骸の山。大量の傷病兵の看護には、ヴィクトリア時代の婦人が得意としたような優しい「慰めの言葉」などなんの役にもたたない。患者の吐物や血膿にまみれた包帯を黙々と処理することが看護だという、即物的な自覚に達した若いボランティア看護師クリステイは、大陸の前線に送られた婚約者とおなじように大量死の二〇世紀を生きはじめていたのだ。

進歩と向上を信じた固有の顔立ちをもつ「人間の時代」の人々は、機関銃で掃射され毒ガスで窒息し無意味で無個人的な大量死をとげた。世界戦争を目撃した一九世紀最後の世代は二〇世紀最初の世代に転化する。惨憺たる世界戦争の経験が平凡な文学少女に精神的な変貌を強制した。二〇世紀を代表する探偵小説作家が、このようにして誕生するだろう。

第一次大戦において二〇世紀という大量死Ⅱ大量生の時代が幕を開いた。世界戦争の経験は一九世紀の文明秩序を破壊し、その楽天的な進歩的精神の息の根をとめ、固有の顔立

ちをもつ自立した個人を無機的で無秩序な群衆の集積に変えた。オルテガ・イ・ガセットが『大衆の反逆』で強調しているように、群衆存在は第一次大戦の産物なのだ。

スタンダールやバルザック、トルストイやトーマス・マンが描きだした、反抗する自我と社会の和解や教養主義的自己成長をめざして奮闘する一九世紀的キャラクターの廃墟の上に、ドストエフスキイが先駆的に予見し、フランツ・カフカが正面から凝視したような、不気味なほどに空虚な人間の抜け殻が、未来も自己成長も信じることのない二〇世紀的キャラクターが誕生する。

凡庸であるが故にグロテスクな革命の觀念に憑かれる『悪霊』のピョートルや、特権的な死の觀念を夢想するキリーロフ。あるいは得体の知れない罪に問われ、煩雜すぎて理解できない裁判にかけられ、最後には犬のように無意味な死をとげる『審判』のヨーゼフ・K。毒虫に変身している自分を発見する『変身』のグレゴール・ザムザ。

大戦後のヨーロッパを襲ったモダニズムIIアヴァンギャルド芸術運動の大波は、フランスのダダイズムとシュルレアリスム、ドイツ表現主義、ロシア・フォルマリズム、イタリアの未来主義など、例外なく一九世紀的な人間観や世界観のラディカルな破壊をめざした。ジェルジ・ルカーチとマルティン・ハイデガーによる左右の二〇世紀哲学もまた、同様に

第一次大戦の産物にほかならない。ルカーチはポリシエヴィズムに、ハイデガーはナチズムに荷担した。ナチスドイツとソ連はともに異様に過酷で残忍な二〇世紀国家で、両者が双生児のような絶滅収容所体制を建設した事実はむろん歴史の偶然ではない。

探偵小説形式はそもそも群衆の時代の文学形式として、エドガー・アラン・ポオが発明したものだ。ヴァルター・ベンヤミンは「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」で、ポオの短篇「群衆の人」を探偵小説の「レントゲン写真」のようだと指摘している。探偵小説形式の骨格は、ロンドンの雑踏のなかで深夜から早朝まで理由なく他人をつけ廻す男の物語において、すでに提出されていた。「マリー・ロジェの謎」はまさに犯罪の痕跡が、都市群衆の背後に消滅する現代的な事態を主題化している。

フランスで七月王政期から第二帝政期にかけて成長した群衆社会が、全ヨーロッパ的な規模で社会的に完成するのは第一次大戦後のことだ。オルテガが見いだした二〇世紀的な群衆とは、ある意味で塹壕の死者と同型的な存在だった。大量死をとげた戦死者が生者にとり憑き、生者に変態したともいえる。両者はその無意味、その無個性において同質的なのだ。

もはやボロ屑でしかない死者と相似形の、群衆存在と化した人間による自己復権の欲望。

それに応えるものとして、二〇世紀に固有の小説ジャンルとして探偵小説形式は成長していく。とはいえ単純に一九世紀に戻るなど、だれにも許されてはいない。すでに時代は世界戦争を通過した二〇世紀なのだ。古典近代的な人間概念の解体を試みるダダイズムとシュルレアリスム、フォルマリズムと表現主義の狂乱怒濤の時代に、人間の復権なる時代錯誤的な試みはいかにして可能なのか。

探偵小説は死者に二重の光輪を意図的に授けようとする。機関銃で泥人形さながらに撃ち倒された塹壕の死者とは比較にならないほど、探偵小説の被害者は栄光ある特権的な存在だ。なぜなら犯人は狡知をつくして犯行計画を練りあげ、それを周到に実行するのだから。探偵小説における死者は、大量死をとげた戦場の死者とは異なる固有の死者、意味ある死者、ようするに名前のある死者だ。

しかも犯人が死者に与えた第一の光輪に加えて、さらに探偵は事件の被害者に第二の光輪をもたらす。狡知をつくした犯罪の真相を、探偵が精緻きわまりない推理で暴露する結末において被害者の存在はさらに特権化されるのだから。このようにして、ポオの創造になる「謎—論理的解明」をプロットの骨格とした奇妙な小説形式は、第一次大戦後に到来した群衆の時代に急速に発展するための条件が与えられた。

両大戦間の「危機の二十年」(E・H・カー)のあいだに急成長した探偵小説は、その精神を同時代のモダニズムⅡアヴァンギャルド芸術運動と共有する。ポリシェヴィズムとナチズムの時代的な波浪にさらされていた、ワイマール期ドイツを代表する思想家や批評家が、たとえばヴァルター・ベンヤミンやエルンスト・ブロッホやジークフリート・クラカウアーのように、探偵小説形式の現代的な意味を察知したのは当然のことだろう。

しかし探偵小説は、ダダイズムなど大戦間のアヴァンギャルド芸術のように、人間概念の破壊を正面に掲げたものではない。すでに存在しない「人間」なるものに人工的な二重の光輪をもたらすことにおいて、それは瞬間的で虚構的な、しかも劇的な復活を巧妙に演出する。だが、そのようにして復活させられた「人間」とは、探偵小説形式に適合的な、抽象化されたパズルの項でしかない。創ることにおいて壊し、壊すことにおいて創る。探偵小説の戦略的二重性は、ジャック・デリダの脱構築戦略とも通じる二〇世紀的な方法意識の産物にはかならないが、それはポオの方法に起源がある。

探偵小説のジャンルの確立の起点に位置している『スタイルズの怪事件』には、直接的あるいは外見的な点でも世界戦争の影が濃密だ。作中の田舎町スタイルズは、作者が傷兵病院の看護師をしていたトーキイの郊外をモデルにしている。キャラクターや事件の骨

格もまた、大戦下という時代条件を前提として設定されている。

詳細は次章で論じるが、たとえばワトスン役ヘイスティングズは大陸の戦場で負傷し、治療と休養のために一時帰国を許された兵士だし、探偵役ポワロは戦禍を逃れてイギリスに避難してきたベルギー人だ。ハンナ・アーレントが『全体主義の起原』で強調しているように、第一次大戦は全欧的な規模で大量難民と無国籍者の激増を招いた。難民もまた戦場や絶滅収容所の大量死と同様に、世界戦争の時代がもたらした人間の異様な存在形態にほかならない。最初の二〇世紀的な探偵キャラクターが、第一次大戦の難民だった事実注目しておこう。

大戦中に執筆されたクリステイの第一作からは、本格探偵小説の誕生の秘密を読むことができる。クリステイにおいて生じた事態は、前後してデビューしたドロシー・セイヤーズにも、あるいはS・S・ヴァン・ダイン、エラリー・クイーン、デイクスン・カーをはじめとする大戦間の英米探偵小説の巨匠たちの場合にも反復されていく。

セイヤーズの『誰の死体?』には、クリステイの『スタイルズの怪事件』にもまして世界戦争の影が濃密だ。探偵役のピーター・ウイムジイ卿とワトスン役の従僕ハンターは第一次大戦の復員兵という設定だし、加えてピーター卿は砲弾シェルショックの後遺症に悩まされ

てもいる。ヒステリーに酷似した症状を示す、第一次大戦の塹壕で大量発生したシエルシヨックを、ジークムント・フロイトは「快樂原則の彼方」で、外傷神経症として究明することを試みた。フロイトの分析を前提として、清水多吉は次のように述べていく。

この大戦での両軍将兵の超自我は、いまだ秩序ある家族、古い慣習もほど良く生きている社会、いまだ生活に根づいている教会、それに権威ある国家機構であった。(略) それらの超自我が目の前で木端微塵に破壊されていく。あの四二サンチ砲が一斉に火を吹けば教会も病院も一般家屋もひとたまりもなかった。(略) 北フランスから延々と延びたあの塹壕線は、十九世紀どころか中世以来、ヨーロッパ文化・文明が最もよく栄えた地、いうならばヨーロッパの中心地であったのだ。それが一瞬にして崩れて行く。呆然となつてしまい、我を忘れてしまい、塹壕の中で立ち尽くし、あるいはうずくまり、督戦隊のピストルによる督戦にも反応しなくなつてしまつたとしても不思議ではない。

(「第一次大戦と外傷性神経症」)

続いて清水は、「彼ら外傷体験者、神経症罹病者たちの苦しみは、戦争が終わつたから終

わったわけではない。彼らの胸中では彼らの心を支えてきた価値観がすべて崩れ去った。頭は混乱し、心は空白であった」、「青白く、うつむき加減であり、何を考えているのか外からはうかがいしれない青年たち。やがて、彼らの中から文学、芸術活動に登場する者も出てくる。それらの文学作品は『ロスト・ゼネレーション』（『失われた世代』）の作品群と呼ばれるようになるだろう」とも述べている。

ベルギー人の戦争被災者ポワロにきびすを接して登場した、第二の名探偵ピーター卿とは戦争神経症を病んだアプレゲールだ。しかもピーター卿の探偵行為は、ロスト・ジェネレーションの文学や芸術行為に克明に照応している。「事件に取り組むようになったのも、気晴らしのためでした。戦争が終わってすぐに辛いことがあつて、そのせいで塞いでもいきました」。

ドロシー・セイヤーズの第一作『誰の死体？』でピーター卿は、このように医学者フリークに語る。作者の設定によれば、犯人のフリークは『シエル・シヨック治療における心理療法の応用』や『フロイト教授への返書・アミアン後方基地における実験例』などの著書がある戦争神経症の専門家だ。「善悪の区別は、脳細胞のある状態に伴う一現象であることが観察されており、これを取り除くことは可能なのである」と主張する生理学的決定論

者フリークは、当然のことながらピーター卿の外傷神経症も「脳に古傷が残されている」結果に過ぎないと診断する。

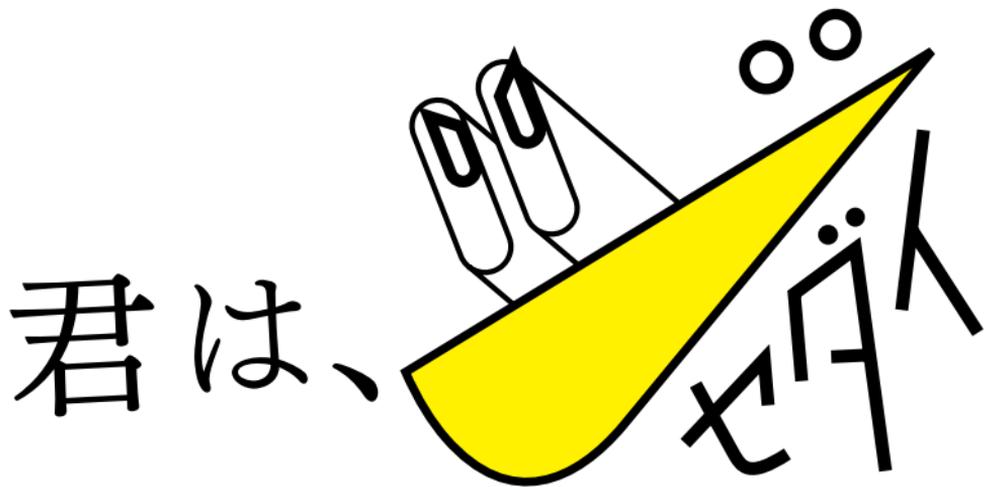
精神や心理は身体や生理に還元しようという、機械的唯物論を信奉するところのフリークのキャラクターは典型的に一九世紀的だ。ようするに中年フリークは、コナン・ドイルが造型した「悪の天才」モリアーティ教授の焼き直しに過ぎない。しかし探偵役は、大量死の墓場と化した戦場の塹壕から幽鬼のように彷徨い出てきた二〇世紀青年なのだ。セイヤーズの『誰の死体?』とは、世界戦争をもたらした一九世紀人の「大人」と、世界戦争で精神的に破壊された二〇世紀人の「青年」が、犯人および探偵として死闘を演じるドラマにほかならない。

フリークによる犯行の動機は、傷つけられた自尊心や名誉欲という具合に、いまだ人間性が信じられていた一九世紀に属している。このように動機は平凡だが、しかし犯行計画それ自体には二〇世紀的な倒錯性が見いだされる。フリークは「余分な死体が転がっているだけでは誰も罪に問われぬ」と考える。医学者の特権を利用して入手した屍体を、復讐のため殺害したレヴィの屍体と入れ替えてしまおうというのがフリークの着想なのだ。レヴィの屍体は救貧院で死亡した男として埋葬され、地上から消滅する。救貧院に収容され

ていた男は犯人の作意の結果、隣家の浴槽で「鼻眼鏡以外は何も着けていな」い屍体として発見される。

正体不明の屍体、名前のない屍体。これが「誰の死体？」であるのか、探偵役は必死で究明しようと努める。たまたま犯行を隠蔽するために利用された屍体、だれのものでもない匿名の屍体、凡庸で無意味な屍体とは、世界戦争が大量生産した産業廃棄物も同然の無数の屍体を寓意している。「誰の死体？」を執拗に探究する探偵行為は、血みどろの肉屑と化して虚無の淵に消えた戦友たちに人間らしい尊厳を、ようするに固有の名前を回復させようとする、シエルショック患者には逃れることのできない自己回復行為となる。

この闘争にピーター卿は、かろうじて勝利をおさめる。犯人は自殺し警察に逮捕される。それでも屍体の名前は最後まで明らかにされない。作者セイヤーズはアプレゲールの探偵役に共感をよせながらも、人間の復権を求めるピーター卿の試みが、最終的には失敗に終わるだろうことを冷静に暗示してもいる。『誰の死体？』という出発点において、大戦間探偵小説の運命はすでに先取りされていた。



# 君は、 何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、  
行動機会提案サイトです。読む→考える→行  
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ  
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう  
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

## ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月  
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

## ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。  
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

## 星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、  
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

# 行動せよ!!!